

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2019.7) 平成30年度:103.

看護実践につながる看護診断の定着に向けた取り組み

宮地 実穂子

シンポジウム 看護実践につながる看護診断の定着に向けた取り組み

旭川医科大学病院 6階東ナースステーション 宮地 実穂子

旭川医科大学病院(以下、当院)では、情報収集の枠組みを系統立てたものとしアセスメント能力を高めること、看護上の問題を共通用語で表現することを目的として1992年に看護診断を導入した。看護診断を定着させ活用していくために、看護部の教育委員会・記録委員会・患者看護支援システム委員会は連携し、教育体制の整備、指導者の育成、システムの構築、看護記録の整備などを行っている。

看護診断は看護で解決可能な目標を達成するための看護ケアの根拠になる。当院では看護診断を活用し個別性のある看護実践につなげるために、2012年から指導者の育成として看護診断力アップチーム(以下、アップチーム)を結成した。当初は、副看護師長5名で構成されていたが、現在は副看護師長と中堅看護師で構成されている。アップチームのメンバーは教育委員会とともに出前カンファレンスや事例検討会を実施している。出前カンファレンスとは、アップチームのメンバーが病棟に出向きカンファレンスに参加して司会とファシリテーター役を担い、看護診断の検討を支援するものである。アップチームが推奨するカンファレンスの手順は看護診断の検索や当てはめにならないよう、患者を多角的視点から捉え、患者の強みに着目しながら問題点を絞っていく。そしてカンファレンスで集まった患者・家族の情報を診断指標、関連因子や危険因子と照合し看護診断する。目標設定や看護介入の検討では、個別性を考慮して方向性を定め、具体的な看護介入を決定する。この手順に沿ってカンファレンスを行うことで、看護診断をするまでの過程には患者の強みや患者自身が考える目標が重要であり、集まった情報が診断指標などの根拠になっているとスタッフが実感する機会になっていた。

また、当院は患者参加型の看護を推進している。看護計画協働立案は、看護のインフォームドコンセントを基盤に、患者・家族が主体的に参加し「一緒に考え決定する」ことで自らの健康問題に取り組むことができる。さらに、看護師の判断とそれに伴うケアを明確に伝えることによって患者・家族の希望や思い、価値観などを理解し、より個別性のある計画を立案できる。看護診断の診断指標と関連因子、危険因子は、そのまま表示しても患者には伝わらず、個別性も見えてこない。そのため、各診断指標や因子が具体的にはどのような状況なのかがわかるように、実際の患者の言葉や状況を表示している。目標や介入内容についても、患者が理解しやすいように具体的な内容を表示することで共通認識できている。患者からは「自分の目標に向かってどうしたらよいのかがわかりやすい」等の言葉が聞かれており、看護診断を活用することは、患者のために有益な看護介入に繋がっていると言える。

看護診断のさらなる活用と定着化を目指し、今後も継続していきたい。